

一八八二年三月某日

〔信者と共に讚神のよろこび、ラカールの愛——愛の酒（こころ）〕

また或る日、タクールは自室の小ベッドの上に坐っておられる。いかにも嬉しそうな姿で——笑顔である。カーリークリシュナ氏（訳註）と連れだつて、校長はお部屋に伺つた。カーリークリシュナ氏は、友人が自分を何処へ連れていくのか知らなかつた。友人はこう言つたのである。

「居酒屋へ行くのなら私といっしょに行こう。そこにはブドウ酒の大がめがあるよ」

校長は御あいさつの後、この話をタクールに披露（ひろう）した。タクールはお笑いになつた。

タクールはこう言われた。「神を讃える喜び、真理を悟る喜び、この喜びこそが酒だ。ほんとうの愛の酒だよ。人生の目的は神への愛だ。神さまを大好きなることだよ。信仰が何よりも大事。知識で神を知ろうとするのはひどく難しいことだ」

こうおっしゃつて、タクールは歌をうたい出された。

カーリーの性（さが）と相（すがた）を知るは誰ぞ——

六派の哲学 はるかに及ばず

絶対の喜びに満ちあふれし真我（アートマン）

カーリーは至聖の音 オームの如し  
十重、二十重の栄光に光りかがやき  
その意志は大宇宙の法則なり

その子宮に全宇宙をはらみ  
その意志が宇宙の法則となる  
大なるものの性と相を  
知り得るは唯ひとり 大時クマヘイカウラのみ……

大時クマヘイカウラ——絶対神シヴァ

ムーラダーラにサハスラーラに絶ゆることなく  
好ましき心像を想い描きて

カーリーは蓮の花むらに  
配偶つまと睦むつみ合う白鳥のごとし

大海を泳ぎ渡らんとして力つき  
ただよえる人を見てブラサードは笑う  
月を捕えんとして手をのぼす

ラームブラサード——十八世紀にベンガル州  
で生まれた宗教詩人

小児の愚を　くりかえすなかれ、と――

タクール、聖ラーマクリシュナはくりかえして言われた。神さまを愛すること――これが唯一の人生の目的だ。プリンダーヴァンの牧場で、乳しほりの男女や、牛飼いたちが聖クリシュナを愛したようにね。聖クリシュナがマトウラーに行かれたとき、牛飼いは別れを悲しんで泣きながら歩いただろう。こう話されると、タクールは目を上につり上げてお歌いになった。

いま私は見たよ――

若い一人の牛飼いが

若い樹の枝を手にもって

生まれたばかりの子牛をだいて

「カナイよ、どこにいる」とよんでいる

終つひには力だけでカナイとつづかず、かすれた声で

「カ……、どこへいった」

カナイ――聖クリシュナの若いときの愛称

そして、目からは溢れる涙。

愛情のこもったタクールの歌をきくうちに、校長の目にも涙がにじんで来た。

## 第2章 聖ラーマクリシュナ、信者と共に

(訳註) カリーリークリシュナは後に、ヴィディヤサーガルの大学で、サンスクリットと歴史学の主任教授となった。